

# 関東の小野小町伝承

小堀光夫

## 1

ふらりと近くにある町や村に出掛けると、思いがけない話に出会うことがある。平成11年2月25日、埼玉県川口市に住む筆者が、筑波山に出掛け、帰り道を考えながら地図を見ると、小野越という地名を見付けた。おのごえ：小野小町の話でもあるのかなど、さして遠回りにならない小野越に行つて見ることにした。

小野越は筑波山麓、茨城県新治郡八郷町にある。そして隣は小野小町伝承で有名な新治村である。小野越に着き、さつそく近くを通りかかったお爺さんに、小野越の地名の由来を尋ねると、おおよそ次のような話をしてくれた。

ここには、北向観音という観音様があつた。近年、雪の積もつた日に観音様は泥棒に盗まれてしまつたが、この観音様には、昔ひどい皮膚病を患つた小野小町が祈願して病を治してもらつたという話がある。小町は隣の新治村小野に住んでいて、山を越えてここに祈

願しに来たので、小野小町が山を越えて来た所ということで小野越と呼ぶようになった。

このあまりのタイミングのよさ、小野という地名のもつ面白さに味をしめた筆者はその後、小野小町伝承を探究しに、関東を歩いて見ることにした。本稿はそういった訳で、関東の小野小町伝承についてのレポートである。

## 2

それでも関東には、どのような小町伝承があり、地域的にはどれくらいの広がりをもつてているのだろうか。(はじめに筆者の目に触れた小町伝承と、その伝承地を概観してみたい)^(1)

①茨城県新治郡八郷町小野越

ひどい皮膚病の小町が、北向観音に病氣平癒の祈願をして日参したところ治つた。小町がお礼に、身に付けていたこうがいを、お堂

の近くにさすと、それが根づいて大木となつた。この木の皮を煎じて飲めば皮膚病にかららないという。

## ②茨城県新治郡新治村小野

小町が奥州に向かう途中で病気になり、土地の村長である小野家が、手厚く看護したが亡くなつた。小町の墓は、小野家の庭の片隅に現存する。ここに参拝すると下の病に効くという。

## ③茨城県行方郡牛堀町上戸

眼病を患つた小町が、牛堀町上戸の觀音寺（この寺は、現在は上戸にあるが、元は尾の詰にあつた。尾の詰は小野住であるという。）に日参して病気が治つた。そして小町は、お礼にしだれ桜を寄進したという。

## ④茨城県常陸太田市瑞竜町

和歌を詠んでいた徳川光圀に、下の句を教えて姿を隠した若い女性があつた。女性が姿を隠したこの地を以後、身隠し山と呼ぶようになつた。そしてこの姿を隠した女性は、近くの小町塚から出てきた小町の亡靈であつた。

## ⑤千葉県東金市小野

ここは小町の誕生地ということになつてゐる。また新治村で死んだ小町は、ここで生まれたとの話もある。地元の貴船神社の「貴船大明神縁起」にも小町の名が見られる。

## ⑥埼玉県深谷市町田字小町

岡部藩士の堀九兵衛は、務めの帰りにいつも何ものかに後をつけられてゐる氣配を感じていた。ある日の夜、小町にさしかかつた時、

九兵衛は、「狐か狸か小野小町の靈か知らないが、お前をここに祀るからもう後はつけるな」と言つて、小町地蔵を建立した。この小町地蔵にお参りすると、子供の夜泣きに効くという。（現在、地蔵はない）

## ⑦神奈川県厚木市小野

小野小町は、ここで生まれたことになつてゐる。また小町を祀つた小町神社もあり、小町神社を管理している本山派の修驗「宮野院」（小田原、玉滝坊配下）が、安政七年に作った、木版刷りの縁起「小野大明神縁起」では、源頼朝の愛姫が、白髪を小町の靈に念じて元の黒髪に治してもらつたお礼に、この神社を建てた経緯が記されている。また若白髪治しに靈験があるとされてゐる。

## ⑧ 東京都文京区小石川（無量院）現在、廃寺

○江戸小石川無量院に小野小町が墓あり、本堂の脇に有、是は此寺の檀那牧野家大阪御城番のとき、大和の國に小町の墓有、その石殊の外ふるきものなりければ、牧野殿茶の湯數奇の餘りその五輪の内をもらひ受、墓所にはあらたに石塔建立ありて、件の石をば江戸の邸に取よせ、燈籠にこしらへ庭に置けれどに、折々怪異の事あり、剩へ三世まで早世なりしゆへ、不祥のものなりとてその靈をおそれ、菩提所なれば無量院へ寄附ありしに、又此寺にてもとかくあやしき事ありしまゝ、かゝるものは庭中の觀に備ふるもいかゞとて、本堂のわきへうつし、小町が墓所となし、その移したる日七月八日を忌日をして、毎年法事行ふ事なり、それより寺に怪異もなかりしとぞ、今年安永八年小町の九百年忌にあたり、七月は盆中故八月八日にそ

の法會別に行ふ事なりし、その時參詣して親しく見たり、燈籠の火ふくろにせし所には梵字あり、但し小町の正忌日は三月某の日なりとぞ

⑨ 東京都国分寺市（医王山国分寺）

癩病に苦しむ玉造小町が、国分寺の薬師に病氣平癒を祈願していとところ、童子があらわれ小町を寺の池までつれて行き、「この池の水で体を洗いなさい。すると病は平癒するでしょう」と告げて姿を消した。小町が言われた通りにすると病は平癒し、その後この池は真姿の池と呼ばれるようになつたという伝承になつてゐる。この伝承は国分寺（真言宗豊山派）の「医王山略縁起」建武二年奥書（一三三五）と同じ内容である。

そして真姿の池から流れ出た水を真姿の流れ（現在は元町用水と呼んでいる）と呼び、生活用水として利用していた。また流れを塞き止めた「どんどこ」と呼ぶ溜りでは、洗濯や農作物を洗つた。

⑩ 東京都町田市小野路町

小町が悪瘡を治すため京都からこの地に来て、万病に効くと言われる仙水と呼ばれる清水と、その傍らにあつた薬師仏に願をかけたが治らない。そこで、小町が、薬師に「南無薬師諸病悉の願たて身より仏の名こそ惜しけれ」と歌を詠むと薬師から「しぐれの雨ただひとときのものぞかし小町が蓑笠そこ脱ぎおけ」と御返歌があり、病が平癒したという伝承になっている。またこの伝承は、町田市小野路にある萬松寺（臨済宗建長寺派）の『小野山萬松寺略縁起』寛延元年（一七四八）と同じ内容である。一方、地元ではこの

仙水（清水）を百日の旱でも枯れることのない小町の井戸と呼び、上水道が普及する以前は、地域の生活用水（飲料水や風呂の水）として大切に利用していた。

⑪ 群馬県富岡市後賀

出羽に帰ろうとしていた小町が皮膚病にかかり、仏の告げにより、鎌川のほとりの石薬師に願をかけた。しかしながらないので、⑩町田市の事例と同様、薬師に「南無薬師…」の歌をかけると、薬師かも「むらさめ…」の返歌があり、病が全快した。そして、お札に塩を供えて、旅立つたことから、それ以後、塩薬師と呼ばれるようになつた。また皮膚病に冒された小町の顔を隠す霧が、七月七日にかなりずたちこめるという伝承もある。この塩薬師のそばには、塩あじのする水が湧きだし、小町井戸と呼ばれている。この水を風呂に汲んで湧かして入ると皮膚病に効くといわれている。

また富岡市相野田の得成寺には、小町伝承を記した『小町山略縁起写』（年代不詳）があり、その記事によると、小町が薬師に願をかけるために通つた庵がその後、普濟寺となり、その普濟寺が、真言宗豊山派、得成寺になつたことが記されている。

⑫ 栃木県下都賀郡岩舟町小野寺

年老いた小町が、故郷の奥羽に帰る途中で病気になり、小野寺にある薬師に祈つたが治らず、三杉川の淵に身投して死んでしまつた。哀れに感した土地の人々は、小町塚に葬つた。しかしこの小町伝承は、小野寺にある天台宗大慈寺に伝わる『小野寺旧記』等の古記録や縁起とは話が異なつてゐる。寺の伝承では、⑩町田市、⑪富岡市

の事例と同様に薬師との「南無薬師・」の歌の掛け合いにより病は平癒したという伝承になつてゐる。

以上、①～⑫の地域に伝わる小町伝承について概観してきたが、関東の小町伝承は小野の地名とほぼ一致しながら、一都六県に渡つてゐる。それらの伝承地の中には小野筆を祀つた小野神社が近くにあることや、小野氏関連の伝承があることから、これらの伝承を背景にしていることもわかる。<sup>(2)</sup>

一方それとは別に、関東の小町伝承に関して以下のことも指摘できる。(1)病気治しの民間信仰と結びついていること。(2)寺の縁起、古記録等に小野小町と薬師靈験譚が記され、村の伝承と寺の伝承の二系統の伝承が見られること。(3)小町伝承に地域的なまとまりが、見られること。ひとつは、国分寺市と町田市を結ぶ鎌倉街道周辺地域。もうひとつは、筑波山麓の八郷町、新治村から潮来街道経由で霞ヶ浦東岸の牛堀町へと至る地域である。<sup>3</sup>

その一方で、関東の小町伝承の中には、②新治村の事例のように、小町は奥州に向かう途中で病気になり、小野家で亡くなつたという伝承もある。小野家の伝承では、小町は元慶七年七月七日、六十九才で亡くなり、墓は小野氏の敷地内にある。小町がこの世を去つて以来、例年七月七日（旧暦）の命日には小野家が代々供養を続けてゐるといふ。<sup>(4)</sup>

また⑫岩舟町の事例のように村の伝承では、病をはかなんだ小町が入水自殺し、その遺骸を小町塚に葬つたとの伝承になつてゐるのに対して、同じく岩舟町小野寺にある慈覚大師ゆかりの天台宗別格寺、大慈寺に伝わる『小野寺旧記』の伝承では、⑩町田市、⑪富岡市の事例と同様に、悪病（瘡）を患つた小町が、薬師との「南無薬師・」の歌のやりとりを通して薬師の靈験により病が治つてゐる。つまり村の伝承では小町は亡くなり、寺の伝承では、有り難い薬師のご利益を説くため小町は病から救済されている。

る伝承とがみられる。関東の小町伝承に病気が治るという伝承を求めるに①八郷町の事例では、皮膚の病気の小町が、北向觀音に日参し、病気が治つたという伝承になつてゐる。⑩町田市、⑪富岡市の事例では小町は瘡にかかるが、薬師との「南無薬師・」の歌のやりとりを通して薬師の靈験により病が治つたという伝承になつてゐる。

⑨国分寺市の事例では、癰病にかかった小町が、仏の啓示を受て真姿の池で体を洗うと、薬師の靈験により病が治つたという伝承になつてゐる。③牛堀町の事例では、眼病の小町が、觀音寺に百日間参籠し、やはり治つたという伝承になつてゐる。

このことは、村の伝承と寺の伝承の病を治す靈験に対する考え方の違いが読み取れないだろうか。つまり村の伝承では、亡くなつた小町の無念さが伝承の核であり、小町が無念であればあるほど、その小町の靈力で人々の病は癒されると考えられていた。一方、寺の伝承は、あくまでも薬師の靈験を説明する手段として、この小町伝承を利用しているように思われる。そして村の小町伝承に寺が関与すればするほど、小町は仏によつて救済されるという話に変えられて来たのではないだろうか。

それは次のような病氣治しの民間信仰からもうかがえる。例えば

②新治村小野の小町の墓には、多数の燐焔が供えられている。この燐焔は近隣の婦人たちが、婦人病の平癒を祈つて供えたものである。婦人たちは、病氣平癒を小町の墓に祈る時、墓に供えられている燐焔を一つ持ち帰り、病気が平癒したら二つにして墓に戻している。<sup>(5)</sup>なぜ燐焔なのかという疑問が残るが、他地域にも病氣治しの燐焔地蔵や燐焔祭りといった民間信仰もあることから燐焔に呪力を認めていたと思われる。

また新治村小野の小町の墓の前には自然石で作つた御手洗石がある。これは、東京の高野常蔵氏が夢の報せを得て、医者に見離された奥さんの病気の平癒のために小町の墓に詣でたところ奥さんの病気が治り、お札に明治四十一年七月に寄進したものであるという。<sup>(7)</sup>さらに①八郷町小野越では、北向觀音のお堂近くの大木は、小町がさしたこうがいが成長したもので、この木の皮を煎じて飲めば皮膚病にかかるないとされている。⑪富岡市後賀では、小町が瘡の平

瘡を祈つた塙薬師の近くから鉱泉が湧きだしていて、その鉱泉をわかして入ると皮膚病に効くといわれている。<sup>(8)</sup>また病氣平癒の祈願のため、ここにある石仏を借りて帰り、祈願成就の時には倍にして返すという信仰もある。<sup>(9)</sup>

このように関東の小町伝承は、寺とは関わりのない皮膚病等を中心とした病氣治しの民間信仰とも密接に関わっている。小町伝承は意外とこんなささやかな民間信仰を出発点として、その信仰が盛んになると寺の縁起等に取り込まれて、寺の管理する薬師や薬師堂の靈験を説く話となつていったのではないだろうか。

#### 4

小町伝承は村の伝承とは別に、病の小町が病氣平癒を願かけした薬師や薬師堂を管理する寺に伝わる略縁起や古記録等に筆録され、その伝承が管理されてきた。それらの縁起類のほとんどは江戸期に作られたものであるが、ここでは小野小町と薬師との「南無薬師⋮」「むらさめ⋮」の歌の掛け合いで小町の病が平癒したという「小野小町と薬師靈験譚」<sup>(10)</sup>の背景について考えてみたい。

⑩東京都町田市小野路「小野山萬松寺（臨濟宗建長寺派）」

江戸期の本末帳に、建長寺の末寺、普濟寺（現、立川市）の末寺として記録されている萬松寺には、冊子形態の『小野山萬松寺略縁起』（現在『小野山萬松寺略縁起』は紛失中で、こゝでは紛失する前

に現住職である柴崎敬嚴師が口語訳していたものから内容を探るしかない。」が伝えられている。この略縁起は、寛延元年（一七四八）に当時の住職が、口伝されていた寺の伝承をまとめたもので、その中のエピソードの一つとして小町伝承も記されていた。

小町伝承の内容は、京都で悪瘡に罹った小町が病氣平癒のためこの地の薬師仏と仙水をたよってやつて来たが、祈願しても治らないので「南無薬師…」の歌を詠じたところ薬師の靈験により病気が治つたというものである。

『小野山萬松寺略縁起』では、萬松寺の開基は、覺翁等公といふ仙人であり、この仙人が湧出させたのが万病に効くという「仙水」で、これが後の「小町井戸」である。また開山は滅宗宗興禪師で、元徳二年（一二三〇）となつてている。

しかし、この開山については『建長寺史』末寺編（建長寺、昭和五二年）では、生没年と開山の年が合わない（二十一歳で開山とは考えられない）と疑問視している。さらに同書は天台系、真言系、浄土系寺院や、また独立した寺院ではなく、薬師堂や觀音堂などからも禅寺化した事例も多いことを述べ。この寺の開山も弘法大師の化身説があることや、万病に効く仙水の伝説もあることから、萬松寺の前身は密教系のものかもしれないとしている。

つまり萬松寺の小町伝承の背景には、仙水による病氣治しの信仰を民衆から集めていた薬師堂と、それを管理する修驗の姿が推測される。

#### ⑪群馬県富岡市相野田「小町山祇祥真院得成寺（真言宗豊山派）」

得成寺には『小町山略縁起写<sup>(11)</sup>』がある。年代は不詳であるが、元禄期の記事が見えることから、それ以降に製作されたと思われる。形態は巻子本になつてている。小町伝承に関するところを抄出すると次のように記されている。

往昔より石薬師有之小町難病平癒の心願に日夜參籠ある満願の

夜 捧誦す

南無薬師願ふ諸くわんの叶はずば

身より佛の名こそおしけれ 小町

満願夜夢眠中授り給ふ

御歌

白雨はた、一時のものそかし

己が身のかさこ、にぬきをけ

現詠し如来空中に帰られ給ふ直に病氣全快因て里人等造子孫繁栄のため塩を積備へ候故に字塩薬師と唱へ其しるしか今における塩の井戸あり夫より小町は本国陸奥江立帰られ候

記事の内容は、京から陸奥への旅の途中で病氣になり、石薬師に参籠して満願の日に薬師との「南無薬師」の歌のやりとりがあり、病氣が治つた小町は陸奥に向て旅立つた。石薬師はその後、塩が供えられたので塩薬師と呼ばれるようになったというものである。さらに縁起では、この記事に続けて、この小町の庵が普濟寺となり、普濟寺が得成寺の前身であるといった内容になつてている。

しかし、そういった富岡市相野田の得成寺の伝承がある一方で、

富岡市後賀の塩薬師には「南無薬師：」歌の刻まれた石碑があり、裏面には、「後賀村塚本右衛門、文政十三年再興」と記されていること、さらに村の伝承では、小町の櫛や髪の毛を埋めたという小町塚があることから、村の伝承であった小町伝承を縁起の作者が採用したことも推測される。

さらに得成寺については『群馬県北甘楽郡史』(昭和三年)に、能信坊という修験の寺が、かつては得成寺の隠居寺としてあり、第六代、亮賢和尚もそこに住んでいたとの記事が見えること。また江戸期の寺院の本末帳には、得成寺は碓氷郡八幡村(現、高崎市)<sup>(12)</sup>の大聖護国寺の末寺であり、大聖護国寺の本寺が山城国醍醐三寶院になっていることから、当山派の修験との関わりも考えられる。

現在、この能信坊があつた場所には、亮賢和尚を開基とする小桑觀音があり、後賀の塩薬師と同じ方法で石仏を借り、祈願成就の時は倍にして返させ、子授け、子育て、安産祈願の信仰が行なわれている。亮賢和尚は富岡市上高尾の須藤家の出身という伝承もある。<sup>(13)</sup>

また『小町山略縁起写』には、後の五代将軍、綱吉が、まだ母である桂昌院のお腹にいた時に、亮賢和尚が祈祷によつて、綱吉を女から男に変性させた功績により音羽の護国寺の初代の住職に就任せしたこと。そのため得成寺は、徳川家の御朱印をもらうなど手厚く保護されたことも記されている。

これらのことから、得成寺の小町伝承の背景にも修験の姿が推測される。

(12) 栃木県下都賀郡岩舟町小野寺「小野寺山転法輪院大慈寺(天台宗)」  
大慈寺は慈覚大師ゆかりの天台宗別格寺である。大慈寺には、当時の住職が寺社を中心とした小野寺の歴史を記した『小野寺旧記』を宝暦十四年(一七六四)が伝えられている。しかし現在、原本は紛失<sup>(14)</sup>で、大慈寺の住職が大正三年に紛失前の『小野寺旧記』を写したもののが伝えられている。写本の小町伝承の記事を抄出すると次のように記されている。( )内は筆者が補つた。

日向国法華嶽薬師ニモ小野小町身拋済同廟所有リ小町元来美  
人ノ譽有テ多ノ人思ニテ惡病ヲ請テ乞食流浪(ノ)身トナル此  
薬師ニ參籠シテ病患ヲ析ト得(言)ヘ共敢テ印(驗)ナキ事ヲ  
恨ミテ

南無薬師衆病悉除ノ願立テ 身(ヨリ) 仏ノ名社(コソ)ヲ  
シケレ

ト読テ仏前ノ池ニ身ヲ拋ントスル時ニ薬師如來忽ニ示現シ玉ワ  
テ

村雨ノ唯一通リ降ルモノヲ 己カ身ノ笠コ、ニ脱ラケ  
ト御返事歌有リテ病則平愈(マタ)シテ元ノ如ク成ヌト申伝ヘタ  
リ日向國法華嶽ニテ此歌贈有同様ニ申ナラハス

ここでも、萬松寺や得成寺の伝承と同様に、病の小町が薬師との「南無薬師：」の歌の掛け合いにより平癒した伝承が記されている。

一方、記事の中には「日向國法華嶽薬師ニモ小野小町身拋済同廟所  
有リ」「日向國法華嶽ニテ此歌贈有同様ニ申ナラハス」と、宮崎県東  
諸県郡国富町深年にある法華嶽薬師寺に関する記述があり、法華嶽

薬師寺の「南無薬師」の薬師靈驗譚は小町を主人公として、大慈寺の伝承と同じだと記している。

しかし『三国名勝図会』天保十四年（一八四三）の法華嶽の伝承の記事では、

上東門院の女房和泉式部、癱病を患へしが、種々の医療験なきゆゑに、京都清水の觀音に參籠しけるに、米山、鳳來寺、法華嶽寺、三所の薬師に祈るべき夢告を受く、於是米山、鳳來寺に至て、參籠せしかども其驗なし、因て遙に日州に下り、法華嶽の薬師へ參籠すといえども、其應驗を得ざりければ、此世の業縁は、是までなりと思ひて、身を墜して死せんと、志を定め、辭世に、

南無薬師諸病悉除の願立て身より佛の名こそをしけれと詠じ、既に合掌閉目して、千尋の崖より自ら墜けるに、不思議に救ひ助られ、一異人式部の眼中に現じ、其手を取しと覚えて、

村雨は只ひと時のものぞかし己が蓑笠そこにぬぎおけ

といふ声の下に数年の沈痼忽然として平癒し、玉貌瓊姿に復し、再び京に帰る。今に身投岡、式部谷等、蹤跡若干所、及び式部寄進の琵琶残れり。

と、主人公は和泉式部になつてゐる。そしてここでは、和泉式部は癱病者となり、やはり薬師如来との「南無薬師」の歌の掛け合いにより救われてゐる。

つまり、法華嶽薬師寺の伝承では主人公が、小野小町から

和泉式部に変わつてしまつてゐる。このことは、この伝承が、主人公を入れ替へながら土地土地の実情に合わせて伝承されていたことを意味するのではないかと考える。

そしてこの法華嶽薬師の和泉式部伝承も、『日向見聞録』寶曆九年（一七五九）「法華嶽山」の記事によると、

和泉式部ノ祈誓セシハ平安域ノ因幡堂也當寺薬師如來ハ往古ヨリ靈驗新タルガユヘニ彼ノ縁起ヲ移シ來テ因幡堂ヲ表スルモノナリ

と、京都の因幡堂の縁起を法華嶽薬師寺に移した事が記されている。因幡堂の伝承は、寛永年中（一六二九～四四）に刊行されたと考えられる『新撰狂歌集』<sup>(16)</sup>には、

むかし五条・高辻に住ける人、瘡をいたはりて因幡薬師へこもりて

南無薬師諸病失除の願なれば身より仏の名こそ惜しけれ

とよみければ、内陣より返し

村雨はたゞ一時のものぞかしをのが蓑笠そこに脱ぎをけ

とあり、京都五条・高辻に住む人が瘡（惡性の皮膚病、梅毒、庖瘡）にかかり、因幡薬師に籠もつて、「南無薬師」の歌を詠むと、本尊の薬師如來が安置されている内陣より「村雨」の薬師如來からの御返歌があつたことを記してゐる。

この「南無薬師」の歌は、京都、因幡堂平等寺の住職大釜諦順師の話によれば、因幡堂の御詠歌の一つとなつてゐる。因幡堂平等寺は現在、真言宗智山派の寺院であるが、平安時代の昔から因幡堂

の名で、病氣平癒を祈る庶民の信仰を集めて来た。『一遍聖絵』第四卷、弘安二年（一二七九）の春の条には、因幡堂を一遍上人が訪れ、「因幡堂縁起」が時宗の徒により語られた様子が記されている。また、御詠歌集『神仏道歌松之響』天保十二年序（一八四二）には、「薬師如来御時現之歌」として次のような歌を載せてある。

いづみ式部小しきぶが病をいのりけるとき

なむ薬師病悉成の願なれば身より仏の名こそをしけれ

とよみける御返し

むらさめはしばしのうちのものぞかし罪のみのかさ其所にぬぎ

おけ



図1 「神仏道歌松之響」(駒澤大学図書館蔵)

○寺田薬師如來ノ社 別當蓮乗院  
査して記した地誌『雪の出羽路雄勝郡』文政五年（一八二三）には、次のような記事が見える。

○寺田薬師如來ノ社 別當蓮乗院

「古へは寺田山薬師寺といひし天台宗の寺のありしともいへり。」郷民の物語に、いにしへは小野小町老て故郷に帰り来て小野に住けるに、瘡の出たるを憂て此社に通夜しぬぎごとしていのりつれど、つゆのしるしもあらざればうらみ奉りて、

南無薬師衆病悉除の神なれば身より仏の名こそ惜しけれ。

とぞ堂の柱に書つける。これは、衆病悉除身心安樂といふ薬師本願經の意をもてよめるにこそあんなれ。其夜の夢の中に神出まして、

群雨は唯一ト時トのものなればそこにぬぎおけおのがみのかさ。

夜明れば、かひぬぐいたるがごとく身の瘡ひとつなく愈へたりとなむ、歌のこゝろこそ叶ひづらめ。己と小野とは仮字のかなはざる、薬師仏もかなづかひはえしり給はぬ事かとひとりほ、ゑまれたり。

図1の絵をみると、そこには、旅姿の和泉式部が薬師如来に手を合わせている様子が画かれ、小式部の病の平癒を願う母、和泉式部の「南無薬師・」の歌が記されている。先の『新撰狂歌集』では五条・高辻の人が詠んだ「南無薬師・」の歌を、ここでは歌の文言に多少の違いはあるものの、和泉式部が詠んでいることに注意したい。

そして、江戸後期の紀行家、菅江真澄が、秋田県雄勝郡を巡回調査して記した地誌『雪の出羽路雄勝郡』文政五年（一八二三）には、

これをおもふ、むかし泉式部悪瘡になやみ京の平等寺の因幡堂にまうで、  
南無薬師衆病悉除の願なれば身より仏の名こそをしけれ。

と口号み礼しければ、内陣の奥より微妙の御声にて、

村雨はしばしのほどに通り行其身のかさをこゝにぬぎおけ。

これは稻葉堂の縁起のよし也。みなおなじさまおなじこゝろの

歌也、いづらも作りものがたりにや、いずれのかたかさもあら

むか、かえりて寺田の薬師ほさつの返歌、また小野小町のいへ

るかたよくぞ聞えたる。

ここで真澄が記した瘡の小町伝承は、雄勝郡の小町伝承を管理していた修驗の覚嚴院とは兄弟修驗である蓮乗院が管理する寺田薬師の伝承である。<sup>(18)</sup> そして真澄は、この雄勝郡の伝承は、京都の平等寺因幡堂の縁起と同じであるが、因幡堂では主人公が和泉式部になつていると記している。つまり、因幡堂には瘡の和泉式部の薬師靈験譚が伝承されていたことになる。

この薬師靈験譚は、京都の因幡堂から九州宮崎の法華嶽薬師寺へ、さらに栃木の大慈寺へと、縁起もしくは御詠歌の形で伝えられ、その土地土地の伝承と擦り合わせながら主人公を選び、薬師堂の伝承として修驗の人々によつて展開されて来たのではないかと考える。

宮崎の法華嶽薬師寺、そして京都の因幡堂平等寺へと、ずいぶんと遠くまで足をのばすことになつてしまつた。関東の小野小町伝承を探究する旅はまだ始まつたばかりである。

本稿では、病の小町伝承を中心として、寺の略縁起、古記録に記された伝承について考えてきたが、今後こういった作業を、他の地方の小町伝承にも試みてみたいと思う。

#### 注

- (1) ①『八郷町誌』八郷町、昭和45年  
②『常陸の伝説』藤田稔、第一法規出版、昭和51年  
③『民話のふる里・茨城』今瀬文也、秀英書房、昭和52年  
④『常陸太田市史』民俗編、常陸太田市、昭和54年  
⑤『山武郡郷土誌』山武郡教育会、大正5年、『東金市史』史料篇二、東金市、昭和53年、『旅と伝説』昭和5年10月号「小野小町終焉之地」横田傳松  
⑥『埼玉県伝説集成』中巻・歴史編、塙塙一三郎、北辰図書出版、昭和49年  
⑦『愛甲郡制誌』愛甲郡役所、大正14年、『厚木学体系化調査事業』——厚木の生活文化——厚木市、平成8年  
⑧『譚海』津村宗庵、寛政7年（国書刊行会、昭和45年）  
⑨『武藏國府名蹟誌』府中町青年会、大正5年、『国分寺市史』中巻、国分寺市、平成2年  
⑩『町田の民話と伝承』第一集、町田市、平成9年、『建長

関東の小野小町伝承を巡つて、筑波山麓の気ままな旅から、九州

寺史》末寺編、建長寺、昭和52年

(11)『群馬県史』資料編27民俗3、群馬県、昭和55年、『上毛

伝説雑記』巻之八、泰亮、安永3年序（一七七四）、『富岡

市史』民俗編、富岡市、昭和59年

(12)『柄木の伝説』角川書店、昭和55年、『岩舟の歴史』岩舟

町、昭和49年

(2) 小野神社が近くにある小町伝承の伝承地としては(7)厚木市、

(9)国分寺市、(10)町田市がある。また小野氏に関する伝承がある  
伝承地としては(4)常陸太田市の小野寺氏、(11)富岡市の仁治  
の碑に小野氏の記事、(12)岩舟町の小野寺氏等がある。

(3) 本稿で触れた筑波山麓を中心とした小町伝承と、国分寺市か  
ら町田市へと続く鎌倉街道を中心とした小町伝承の地域的な  
伝承の集合の背景に関しては、稿を別にして考えてみたい。

(4)「小野小町の墓（石造五輪塔）」新治村観光協会、平成5年

(5)(4)に同じ。

(6)『改訂総合民俗語彙』第四巻、平凡社、昭和60年には、「焙

地蔵は、東京都文京区東片町の大同寺にある。笠の代わりに  
焙烙をかぶり、頭痛と目まいに悩むものは、焙烙と団子を供

えるとよいという。焙烙祭は、愛知県知多郡日間賀島で、6

月15日に行なわれる若者を中心とした行事で、夜、ジン松を

焚いた焙烙を舟に積み、沖合で御神火により点火し海に流  
す。」とある。

(7)(4)に同じ。

(8)『群馬県史』資料編27民俗3、群馬県、昭和55年

(9)『富岡市史』民俗編、富岡市、昭和55年

(10)「小野小町と薬師靈験譚」覚書 小堀光夫（『昔話伝説研究』

20号、平成11年6月）を参照。

(11)『富岡市史』近世通史編・宗教編、富岡市、平成3年

(12)『江戸幕府寺院本末帳集成』雄山閣 昭和56年

(13)(9)に同じ。須藤家は占いや祈祷を行なう家という話もある。

(14)「翻刻 小野寺旧記ならびに本尊薬師堂再興縁起」柄木県高等

学校教育研究会国語部会（国語）同研究会、昭和50年）本尊  
薬師堂再興縁起』弘化2年（一八四五）大慈寺蔵、版本では、  
は、笠置山直純寺の正本を明治3年に永友司宗義氏が写し

た写本（永友家本）を、さらに大正13年謄写したもの）

(15)宮崎県立図書館蔵の写本から引用した。（宮崎県立図書館本

は、笠置山直純寺の正本を明治3年に永友司宗義氏が写し

た写本（永友家本）を、さらに大正13年謄写したもの）

(16)『新古典文学大系』第61巻、岩波書店、平成5年

(17)『雪の出羽路雄勝郡』菅江真澄 文政5年（『菅江真澄全集』

第五巻 未来社 昭和50年

(18)「秋田の小野小町伝承」錦仁（『説話文学研究』28号、平成5年）

#### 付 記

本稿は、日本口承文藝學會第23回大会発表（於 沖縄國際大學

一九九九年六月六日）の草稿を元に成稿したものである。なお、資料の提示にご協力頂いた駒澤大学図書館には、篤くお礼申し上げる。

（こぼり・みつお／鳩ヶ谷市立西公民館）